
魔王様、先ほど勇者様と見られるご一行の姿を確認いたしました。

結木しぐさ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様、先ほど勇者様と見られる』一行の姿を確認いたしました。

【Zマーク】

Z4806V

【作者名】

結木じぐわ

【あらすじ】

寝起きが悪くて面倒くさがりの魔王様とそんな魔王様を倒そうとする勇者様。そして魔王様に仕えるわたしの話。「魔王様、先ほど勇者様と見られる』一行の姿を確認いたしました」「はつ。勇者?」「これでもシリアルアスよりです。

1 (前書き)

わたしの話

×月×日。天気は晴れ。

窓から差し込む太陽の日差しが何とも眩しい今日この頃。

「おい、保乃花。カーテン閉めろ」

魔王様は不機嫌絶好調のご様子です。

わたしは先ほど開けたばかりのカーテンをピシャッと閉めると、モゾモゾと布団に潜る魔王様に満面の笑みを見せました。

「おはよついでここまで魔王様。本田のい予定をお聞きになりますか?」

優しく問いかけると魔王様の潜り込んでいる布団が微かな動きを見せます。

「どうやら頷いたようです。」

「では僭越ながら……。先ほど森の入り口付近に勇者様と見られる」一行の姿を確認いたしました」

「はつ。勇者?」

わたしの言葉に魔王様はびっくりしたような声を上げて布団から少しだけ顔をお出しになります。

その顔はどこからどこ見ても不機嫌そのものです。

「はい。勇者様たちがこのままの歩調で休みなく歩かれますと明日の朝にはこの城に到着するものと思われます。つきましては勇者

様との戦闘に備えて本日は準備をする」とがよくありますので……

「ちよつと待て。俺の記憶の中ではつい先日も勇者と戦った気がするんだが」

「魔王様にとつてはつに先日かもしけませんが、人間たちにとってはあの戦いからすでに100年ほど経過しておつますゆえ、妥当な時期かと」

「100年? もつ100年もたつたのか」

魔王様は関心した様子でそつおつしゃいました。

「はい、そつぞくせこます。ですから魔王様。いつまでも子供のようにお布団に潜つておられないで起きて下さいます。今から21分と30秒後には明日について話し合つ会議がはじまりますのであまり時間はありませんよ」

「めんどくせー」

魔王様は深いため息を吐きながらもやつと起き上がり下をこました。

「しゃーねーなあ。保乃花、服

「はい、只今」

そう言つてわたしは魔王様のお着替えをお手伝いした後、朝食の準備をはじめとする朝の支度をテキパキと済ませました。

「何かお前、機嫌良いな

そんなわたしの姿を見て魔王様は不思議そつにお尋ねになりました。

「そりでしょ? こつもと同じですが」

自分で気がつきませんでしたが、どうやら今日のわたしは機嫌が良いようです。

言われてみれば、毎日の中で一番厄介とおもつておる魔王様の朝のお支度もさほど苦ではありませんでした。確かに機嫌が良いといえるかもしません。

「それよりも魔王様。あと2分と17秒で会議がはじまります。急いで会議室に向かって下さい。」

「別に遅れて行つても誰も文句いわねーよ。」

「いいえ、明日は勇者様との戦闘。きちんと対策を練つていただかないと。」

「野郎と戦つてもなんもおもしろくねーのよ。」

「今回は男の方ではないそうです。」

「何それ、初耳。勇者女なの？」

魔王様はそのことに興味を持たれたようです。教えるとその瞳が無言で威圧してきます。

全く。時間がないところの……

「はい、今回の勇者様は女であるとの報告を受けております。」

わたしがそつぱつと魔王様はほとと面白やつに田を細めました。

「女の勇者とは……何年ぶりだ」

「800年ぶりかと」

「そうか……もう800年にもなるんだな」

「ええ」

「前の女勇者は綺麗な黒髪だったな。お前と同じだ」

「それをいふなら魔王様も黒髪ですよ。され、魔王様。急いで下さいませ。本当に会議がはじまつてしまひます」

「女なら一重にもてなさないといけねーし。しゃーねー行くか」

魔王様は氣だるげに立ち上がり、マントを翻しながら扉へと向かいます。

わたしが扉を開けると、当然のよひにわたしの横を通過して……立ち止まりました。

そしてニヤリと意地の悪い笑顔を浮かべます。

「明日が楽しみだな。保乃花」

「ええ、とても」

そんな魔王様にわたしはとつとおきの笑みを返しました。

* * *

「女の勇者のわりにはなかなかだな」

そう言つてお笑いになる魔王様を見て、なんと余裕なのだつとわたしは呆れてしまひました。

勇者様ご一行はこひらの予想通り朝方この城にたどり着き正面の門を突破して来ました。

「出て来なさいー魔王ーーー！」

声を張つてそう言つた勇者はまだ幼い少女に見えました。

華奢な体系でしたがその瞳には搖ぎ無い意思が芽生えていてこの子は間違いなく選ばれた勇者だと、わたしは確信したのでした。

「随分と可愛い顔してるじゃねーか。道中供の奴らに襲われたんじゃねーか？」

「つー変態ーーー！」

勇者とはいってもまだ幼き少女。

魔王様のからかいに顔を真つ赤にしております。

なんとも無垢で可愛らしく……そして愚かな」とドジョウ。

「魔王をいなくなればみんな幸せになれるーお前のその首、わたくしがこの手で切つてやるーーー！」

勇者はそう言つて踏み込むと魔王様に剣を振りかざしました。しかしその攻撃は魔王様に簡単に避けられます。

「なんだ、その程度か？」

魔王様はそう言つて微笑まれましたが次の瞬間顔を歪めました。

「つー？」

ガクリと膝を落とす魔王様を勇者荒い息を整えながら見下ろします。

「はあ、はあ、じつ……よ。王特性の痺れ香の効き田せつ」

そういえば、先ほどから何だか甘い香りがしていふと思つたら…

…アーティストですか。

わたしは一人納得いたしました。

勇者側も負けっぱなしというわけではないようですね。数千年を超える戦いの中で知恵をつけてきたということですか。

七

「これで……終わりよー。」

111

勇者様なめの言ひで、剣を振つ上げます。

魔王様は目の前に迫る赤鬼に目を開きました

咄嗟に劍を避けようとしてますが、体は言へることを聞かなしの様子で、結局はその場に苦しげにうずくまつたままです。

なんとも哀れなご様子に、わたしは顔を顰めます。

一方勇者様は魔王様のその姿に勝ち誇ったような顔をし、その剣を振りかざしました。

しかし、その剣は魔王様に突き刺さることはなく……

「……え？」

勇者様は今自分に起きたことが理解できないご様子で、呆然としたかのように声をお出しになりました。

「………… ククツ、 よくやつた保乃花」

魔王様は自分の前に立つわたしを見上げ、可笑しそうに「言ひました。

しかし言葉とは裏腹に体は辛そうな様子です。
きっと、この香には痺れる以外にも何か効力があるのでしょう。

「あつ……貴方つ」

勇者様はわたしに切りつけられた右手を押さえつけながらわたしを見上げてきました。

その顔は驚きと、困惑と、不安。それらの感情でいっぱいです。
そしてその視線をわたしの手元やると、勇者様はよりいつそうその目を見開きました。

「そつそれは！」

わたしは手に持つ剣に視線を向けました。
驚くのも無理はないでしょ。

「その紋章は勇者のつ」

ええ。

歴代の勇者が扱う剣に施される紋章ですね。

心の中で勇者様にそつ言葉を返すとわたしは一いつ口と微笑みました。

そしてもう一度剣を振り上げます。

次の瞬間には勇者様は床の上に……

わたしはしばらく勇者様を見つめていましたがフツと思ひ出しつて魔王様に視線を向けました。

すると魔王様もぐつたりとした様子で倒れています。

その時、そろいえばまだ痺れ香がたかれただままだといふことを思い出し、わたしは扉の近くに視線を向けました。

さつと、勇者を守るといつ名田のもと人の王がつけた護衛でしょう。

わたしの視線に気がつくと、護衛たちは皆外に出ようと扉を押しますが扉はビクともしません。

素つ頓狂な叫び声をあげるその人たちについ呆れてしましました。

「早く、換気をしなくてはなりませんね」

甘い香の香りに少しだけ顔を顰めながらもわたしは剣を構え直しました。

気がついたら異世界だった。

異世界トリップ。なんてお話の中だけだと思っていたのに、本当にこんなことがあるんだってわたしはびっくりした。
そしてそれと同じくらい嬉しかった。

わたしはあの世界から抜け出せたんだ！
そう思うと、わたしをこの世界に連れてきてくれた人に感謝したいくらいだ。

「よつこお越しくださいました。勇者様」

田を覚ましたわたしを迎えてくれたのは、そつまつてわたしに頭を下げるたくさんの人たち。

勇者？

勇者ってわたしのことだらうか？

そう思つて首を傾げていると、一人の男がわたしに向かって歩いてきた。

「……」

その姿にわたしは言葉を失つてしまひ。

田を奪われるとほこのことだらうか。

美しい金色の髪。透き通るような青い瞳。その姿はまるでおとぎ話の中の王子様。

その人はわたしの目の前まで来ると、片膝をついて丁寧にお辞儀をした。

「ようこそ、グラードへ。私はこの国的第一王子、イリヤ・グラードと申します」

声までも、優しく美しい。完璧な人。

「あ……わたし……樋口香奈といいます」

呆然としながら咳くと、イリヤは一瞬と満面の笑みを浮かべた。その姿にドキリとする。

「力ナ……いこなだ」

「目惚れなんて、ないと思つてた。
そんなもの存在しないと。」

でも、今思えばあの時わたしはイリヤに一目惚れしたんだと思つ。美しいイリヤ。惚れない方が難しい。

「……夢？」

わたしはパチリと目を開けて辺りを見回した。

体がだるいし痛い。

わたしは何をしていたのだけ？

そこまで考えてわたしは飛び起きた。

「…………」

黒を貴重とした部屋。

ベットとソファとテーブル以外に何もないそのシンプルな部屋ははじめて見る部屋だった。

だんだんと動き出した脳が先ほどまでの出来事を思い出させる。わたしはイリヤの命令で魔王の城に行って、そこで魔王と戦い……そして後一歩といつてこのメイドのような格好をした女に倒されたんだ。

あれ？ でも……

「わたし、生きてる…………」

殺されると、あの時わたしは確信したの。だって彼女の目にわたしを殺すことへの反感など感じなかつた。

でも、わたしは今生きている。

どうして？

そういう疑問に思い首をかしげた時だった。

ガチャリと、扉が開く。

思わず身を硬くして、わたしは近くに武器になりそうなものはな
いかと探したが、何も見当たらない。

ゆっくりと開けられたドアからはあのメイドのよつな格好の女が
姿を現した。

思わず息を呑む。

今度こそ、殺されるかと思つたが……

「……起きておられましたか」

彼女は、わたしが壁際ギリギリまで下がり睨みつけていることを
確認するとやう咳いて、深々と腰を折つた。

その姿に、わたしは驚かずにはいられない。

彼女は一体何をしているのだろう。……

「先ほどは手荒な真似をして大変申し訳ございませんでした。傷
むところがあれば何なりとお申し付け下さい。それから勇者様のお
召し物は大変汚れておりましたゆえに、わたしの独断で洗わせて
ただきました」

そこまで言われて、わたしは自分の服を見る。

着ているのは白い上質なワンピースで、先ほどまでわたしが着て
いたはずの戦闘向きで女らしくない服とは大違いだった。

「貴方は誰？何が目的？」

なるべく冷静になつて聞く。

「ここで取り乱してはいけない。

自分は今何も持っていないのだ。

彼女に襲い掛かるうが無駄な抵抗として終わるだろう。それに、もしかしたら次こそは本当に殺されるかも知れない。

「わたしは保乃花と申します。この城で魔王様の侍女をしている者です。目的とは一体何について聞かれてこるのでございましょうか？」

「わたしを生かす目的よ！」

「それは貴方様を殺す理由がないからでござります」

わたしを殺す必要がない？

自分の主人を殺そうとしたのに？

馬鹿馬鹿しい……

「わたしから王たちの情報を聞き出そうとしているが、わたしは何も喋らない！！！」

「そんな下らぬものをなど我が主は求めておりません。それに人の王の情報がほしければ勇者様からお聞きにならなくとも十分に知るすべがござります」

「何よそれっ！」

「言葉のままの意味でござります」

彼女はそこまで言つとわたしに一歩近づいた。

そのことと体が異常に反応する。

「こないで……」

「……勇者様、どうか落ち着いて下さいませ。わたしは貴方様に

危害を加えるつもりはない」と言いました

そういうって彼女は眉を潜めた。
そんな言葉信じられない。

わたしがこの世界で……違う、前の世界を含めて信じているのは
イリヤだけ。

それ以外の人間なんて誰も信じられない。

わたしはキッと彼女を睨みつけた。

彼女は困った顔をしてわたしを見つめていたが、フッと何かに気がついたかのように視線を扉にやると、深々と頭を下げる。

何事がと思って扉を見るが、何ががいるわけでもない。もう一度
彼女に視線を戻すと、その視線はわたしの方に戻っていた。
彼女は何をしているのだ?と首をかしげた瞬間

「どこを見ている?勇者」

低く甘い声が後ろから聞こえた。

びっくりして振り返ると、そこには真っ黒な髪に黒い瞳の男。

その男が誰であるか分かるとわたしはその男から勢いよく離れた。

「魔王つ……」

忘れるはずもない。間違えるはずがない。
わたしの宿敵魔王。イリヤの邪魔をする敵。

その魔王はわたしを見てニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「やっぱりお前可愛い顔してんな。王に食われたりしなかつたか？」

「二二」

その言葉と共にわたしの首を魔王の手が優しく撫でた。
先ほど距離をとったはずなのに、その距離は一瞬にして縮まつて
いた。

これが魔王の力。

わたしは少しだけ恐怖を感じる。

「……魔王様、あまりお戯れがすぎます」とはよしと下をこませ

「なんだ保乃花、嫉妬か？」

勇者様が怖がられております」

はいはい
分かりましたよ

魔王様そう言つてわたしから離れると、この部屋に一つだけある
ソファに腰を下ろした。

「んじゃ、お遊びはそこそこに本題に入ろうか?」

わたしを見下ろしながら魔王は余裕の笑みでそう言う。

本題。

やはり何か意味があつてわたしは生かされているのだ。

たとえ何をされても

この国の、イリヤの不利になるようなことは言わない。

たえ痛めつけられようが、体を触れようが何も言つつもりはない

い。

もしもの時は、この舌を噛み切るだけの覚悟は出来ている。
わたしはキツと魔王を睨みつけた。

そんなわたしに魔王は面白可笑しそうな顔をする。

「どうしよう保乃花。可愛い鬼が睨みつけてくるんだが食べてもいいか？」

「逆に腕を噛み千切られると思いますが」

「それは嫌だな」

やう言つてわざとらしく笑みを浮かべた後、魔王はわたしを真剣に見つめてきた。

思わず体中に力が入る。

「なあ勇者。どうして俺が俺を殺そつとしたお前をいりつけて生かしているか分かるか？」

「……こつちが知りたい」

「まともな答えすぎでつまんねーな……まあいい」

魔王はパチリと指をはじいた。

「簡単に言えれば、同情だよ。俺はお前を哀れに思つて生かしていく

る

「はつ？」

同情？

わたしが哀れ？

何を言つてるんだね？……

そう思つたとき、魔王の手のひらに一枚の鏡が現れた。
魔王の手のひらをフワフワと浮かぶその鏡の中には思いがけない
人物が映つている。

それは会いたくて会いたくて仕方がなかつた愛しい人。

「イリヤっ！」

どうしてイリヤが！！

「…………本当、哀れだな」

魔王の咳きがわたしの耳を掠めた。

2 (後書き)

展開が読めると思いますが、ここできつます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806v/>

魔王様、先ほど勇者様と見られるご一行の姿を確認いたしました。

2011年10月8日03時47分発行